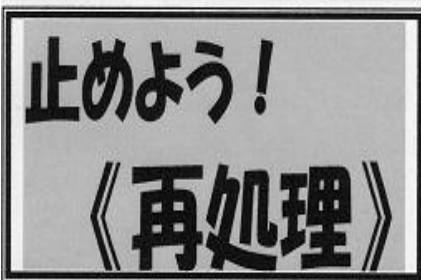


**三陸の海を放射能から守る**  
**岩手の会** (略称) **三陸の海・岩手の会**  
 郵便振替 02240-5-102650  
 ホームページ 《再処理/岩手の環境》  
<http://sanriku.my.coocan.jp/>  
 《本紙の全バックナンバー掲載》



**《天恵の海》**  
 2016(平成28)年  
 2月18日  
 第161号  
 編集事務局 S.Oshida  
 TEL・FAX 019-623-1636

結成10周年記念  
**講演会**

# 日本の原子力政策と三陸の未来

**講師：広瀬隆氏**

**主催：豊かな三陸の海を守る会**

(報告 その1)



豊かな三陸の海を守る会結成十周年を記念して『日本の原子力政策と三陸の未来』と題する作家広瀬隆さんの講演会が、二月六日宮古市民文化会館で開催されました。原発事故によって進行している内部被曝の実態の報告と六ヶ所再処理工場の稼働による三陸の海の汚染の問題など、二時間余にわたって、その危険と私達の姿勢について示唆に富むお話をしました。会場いっぱいのお客の参加者は、豊かな海を守る決意を新たにしながら聴き入りました。講演会は漁協や消費者団体など三十余団体が協賛しました。「天恵の海」編集部として取材しまとめましたので二回連載で報告します。  
 (文責・編集部)

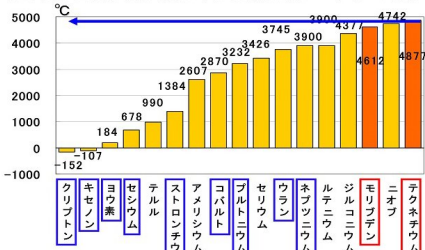
## 人口密度の高い日本での福島原発事故

福島原発事故によって放出された放射能は膨大な天文学的量子であり、しかもかつてない人口密度の高い地域に降り注ぎました。被曝による被害はチェルノブイリの経験から、まさに事故5年後のこれから顕著になってゆく運命にあります。

様々な放射性物質が飛び散った。

事故原発がメルトダウンしたとき、茨城県つくば市で沸点が四八七七℃のテクネチウムが観測されていたので、炉内の温度は五〇〇〇℃近くまで達していたと考えられます。従って、第1図のように原発内のあらゆる種類の

原子炉内の重大な放射性物質がガス化する沸点  
『化学便覧 基礎編 改訂5版』(日本化学会編、丸善)2004年2月20日発行



第1図 放射性核種の沸点

## 高浜原発 再稼働反対 3号機



フルサーマルで稼働 関西電力本店前集会

**日本はフルトニウムを持つな!**

関西電力は1月29日午後5時、高浜原発3号機を再稼働させました。九州電力川内原発1、2号機に続いて3つめです。今回は、再稼働は通常のウラン燃料に比べ、危険なMOX燃料を混ぜた方式によるものです。「もんじゅ」稼働が絶望的となった今、47.5トンもため込んだプルトニウムをしゃにむに発電用に使うことによって「核燃サイクル」を生き延びさせようとしています。

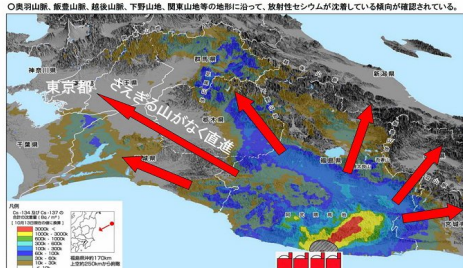
\* 不思議なことに、稼働の前日、甘利明経産再生担当大臣が金銭授受で辞任しました。原発の責任関係である彼の金権的癒着は、電力会社など原発企業からの莫大な金の流れに関わります。再稼働をストップさせ追及すべきです。

## 1・27 関電本社前 集会決議文

**原発は人類の手におえる装置ではない 数千万人が暮らす関西を放射能まみれにするな!**

原発は人類の手におえる装置ではない。福島事故で溶け落ちた原子炉内の熔融物の位置などは不明であり汚染水垂れ流しは続く。規制委員会の審査が原発再稼働に偏り、人々の安全をないがしろにしています。福井地裁は、人間性あふれる仮処分決定を覆し、政権の意のままの決定を行いました。原発再稼働は、原発産業から暴利を得て来た電力会社や大企業の利益の確保と核兵器の原料となるプルトニウム保持のためです。数千万人が住む関西の地を放射能の危機にさらしてはなりません。(要旨)

航空機モニタリングで測定された放射性セシウムの沈着量と地形の関係



第2図 放射性微粒子の拡散

放射性物質がガス化し飛散したと考えられます。これらの放射性物質は「幸いにも」西からの偏西風によって八割方太平洋に落ちたと推定されていますが、ヒロシマ原爆の数十倍とも言われる放射性物質が、東京はじめ人口の集中した地域に降り注いだことは間違いありません。(第2図 第3図)

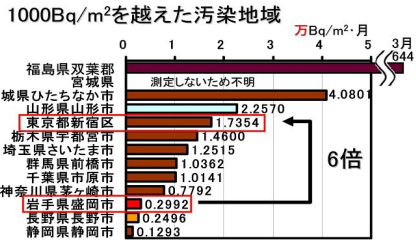
**放射能を帯びた大気の拡散**  
二〇一一年三月六日、福島事故原発からの放射性物質は風に乗って福島県だけでなく、平坦な関東平野に拡散し、約四千万人が住む東京とその近県に降下しました。当時、猛威を奮うヨウ素131などへの防護体制はあまりに不備でした。

# これから顕在化する内部被曝の脅威

## 放射性降下物(微細な塵)は体に入る

福島原発事故で飛散した様々な放射性の塵は長く放射線を出し続けます。この微細な塵が人間の体に取り込まれてしまうと、諸器官に付着してなかなか排出されません。そして周辺の細胞は放射線により長く傷けられます。これを内部被曝といいます。このような「放射性微細粒子(ホットパーティクル)」は東京でも観測され

自治体施設の測定値に基づいて文部科学省が求めた3~6月の放射性セシウム 月間降下物の合計値

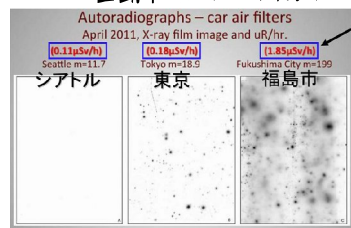


第3図 放射性セシウム降下量

## 土壌中のセシウム

新宿は盛岡の六倍  
自治体施設の測定値比較

第4図 自動車のエアフィルター



シアトル 東京 福島

れました。その証拠が、第4図で「自動車エンジン」のエアフィルターに付着した放射能塵を感光させたレントゲン用フィルムです。福島の自動車と同じように、東京でも福島ほどではありませんが、放射能塵を示す感光があります。

ホットパーティクルはまず呼吸によって吸い込まれ、肺や気管支に付着し、さらには血液によって運ばれ、各器官に蓄積します。

**事故後、心筋梗塞や血液傷害が急増**  
医療機関から厚生労働省に提出されている「診療実績結果報告」の年次統計を見ると「心筋梗塞」が東京都、神奈川県、千葉、埼玉、茨城、福島

の各県とも急増しています。「血液関連癌」の専門病院の入院患者数も増えています。

## 予断を許さない 甲状腺がんの発生

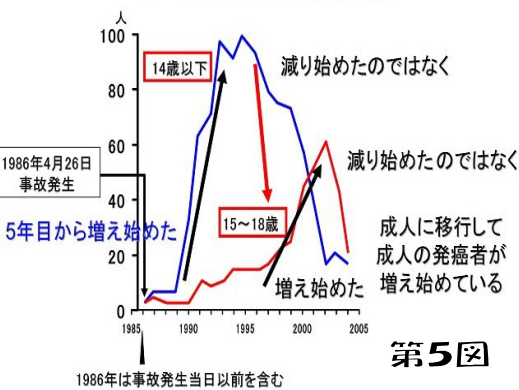
事故発生と同時に、福島原発からヨウ素131が大量に放出されました。ヨウ素は子供の成長に必須のホルモンをつくる成分です。そのため放射能を帯びたヨウ素131は、甲状腺に取り込まれやすく、小児甲状腺ガンを引き起こします。事実チェルノブイリ事故後に甲状腺がんが多発しました。

## 福島事故時子供であった人達は大丈夫か?

福島県は事故当時八才以下であった住民約三六万人について、甲状腺のエコー検査を順次おこなって来ましたが、現在事故後一年以内に

チェルノブイリ原発事故後の甲状腺癌の発生数

ベラルーシ・ミンスク臨床悪性腫瘍病院の統計



第5図

## 第6図

福島県甲状腺検査 (2015. 11. 30 検討委員会)

	癌確定	癌の疑い	合計
一巡目検査	100人	13人	113人
二巡目検査	15人	24人	39人
合計	115人	37人	152人

(ほかに1人が1巡目で甲状腺摘出後良性腫瘍と判定された)

(編集部：注) 2月15日同検討委員会が開催され昨年12月末までのデータを公表しました。その結果、現在、甲状腺がんの「悪性ないし悪性の疑い」と診断された人は166人、そのうち「手術で甲状腺がんと確定」したひとは116人。

生まれたい子供も含めて、二巡目の検査が続けられています。その結果は「福島県民健康調査委員会」に報告されています。現在までに「ガンとされた人」は一二五人、「ガンの疑い」の人三七人で合計一五二人です。疫学調査に優れた業績を残している岡山大津田敏秀教授は、外国人特派員協会で記者会見を行い、「福島県内の甲状腺がんは、チェルノブイリ原発事故による甲状腺がんの増加グラフから想定し、驚くべき被害者の数になる」と見解を公表しました。(次号へ続く)